文化

新なら民俗通信 11

鹿谷　勲

松本楢重の軌跡

感性伝わる写真や文

▼美術記者・楢重

前回（8月6日付、連載10）、増澤文武氏に「松本楢重と高校の修学旅行」を寄稿いただき、修学旅行の意味や松本楢重の活動と、それを全身で受け止めた当時の高校生に感銘を覚えた。

松本楢重は、著書『奈良物語』（昭和50年刊）の奥付によれば、「明治30年（1897）に大和郡山市で生まれ、旧制郡山中学、早稲田大学文学部を卒業し、朝日新聞美術記者、同奈良支局長を経て、現在奈良県嘱託、奈良文化女子短期大学講師」と紹介されている。

中学生の「ふるさと学習」用として、奈良市中学校国語科研究部会が編纂（さん）した『ふるさと奈良』（昭和33年刊）という100頁あまりの冊子がある。志賀直哉、和辻哲郎、堀辰雄、亀井勝一郎、会津八一など高名な文学者の、奈良に関わる詩歌や文章を集めた本であるが、これら文学者に混じって、法隆寺夢違観音と百済観音について執筆した松本楢重の文章が『大和の彫刻美』から転載されている（この副読本の人物紹介欄では、「山梨県生まれ」とある）。

▼天上のいつくしみ

夢違観音を初めて長男に見せると、「まるでにいさんに会ったように思う」と言ったという。あの観音ほど気高い清らかさを持っている青年はめったにいるものではないが、二人の息子達に、できるだけ清らかに、明るく、ほがらかな青年になってほしいと願いながら、新薬師寺の香薬師如来と見比べて楽しんでいたが、この仏像が盗難に遭い、さびしさに耐えられないという。観音と子供への思いを通じて、読者の関心が自然に仏像に向かう美しい文章である。

百済観音については、「滝のようでもある。しかし、滝ほどのすさまじい勢いではない。なにかしら清らかなものがさらさらと天からおりてくる。何がおりているのだろう。おそらく天上のいつくしみではないか。天上のいつくしみは地上の愛と結ぶために、昼も夜も毎日々々、千三百年間おり続けている。それが百済観音の細い長身の姿である」と自らの感性で捉えた観音の姿を一気に表現している。

▼歌人・楢重

国文学者で歌人でもある猪股静彌氏の『野に遊び人に学ぶ』という簡素で美しい本がある。長らく一条高校で国語を教え、さらに帝塚山短大で教鞭（べん）を執った猪股氏の関心は、文学と短歌はもとより、歴史や民俗その他広く周囲にまで及んでおり、著者の人柄を思いながら豊かな喜びを感じた1冊だった。

そのなかの一節に「若き松本楢重を思う」がある。アララギ派の歌人・島木赤彦の歌集には載っていないが、「楢重は　いかにしたるか　そらにみつ　大和の空に　物音もなし」という歌を知っていた猪股氏は、一条高校の講演会に松本楢重を招く。そして講演後の雑談でこの幻の歌を話題にする。松本楢重は天井を仰ぎ絶句したという。

郡山中学時代の大正4年10月に、松本は水木直箭・坂口保らとともに「隠沼（コモリヌ）短歌会」を結成し、島木赤彦の『アララギ』に入会して、若くして結社で注目されていたが、短歌はやめたという。その楢重に対して、猪股静彌は「島木赤彦に　嘱望されし　楢重の　歌の別れの　心知らえず」という歌を詠んでいる。

▼奈良へ誘（いざな）う楢重

奈良支局長で朝日新聞を退職すると、松本は県観光課の嘱託となって、修学旅行の受け入れに関わることになる。奈良県への修学旅行は、東京・神奈川・長野からがなぜか断然多く、「本県のごとき高度の文化財地帯では、学校生徒の実地研修を心から迎えるべき崇高な責任を受け持たねばならない」と松本は述べている（「修学旅行」『大和百年の歩み　文化編』）。

昭和26（1951）年には「奈良地方修学旅行受入対策委員会」が組織され、「出張宣伝」が全国的に展開された。こうした取り組みの一環として、松本は自ら長野県諏訪盆地へ出向いたのだった。その諏訪は、アララギ派を支える島木赤彦の生まれ育った土地だった。

松本楢重は、敗戦後3年にして『正倉院雑談』をまとめたのを始め、多くの著書を刊行し、また編集にも参加している。本領とする彫刻だけでなく、古建築や拓本などの案内書もある。それらは携行に便利な小型本で、美しい写真を多用した楢重の感性が伝わるものばかりである。

それだけでなく、美術や茶道の雑誌、修学旅行関係誌など多くの雑誌に寄稿しており、その全貌（ぼう）はまだつかめていない。ひだる神や食文化など民俗的な事柄への関心もあったようだ。楢重の作歌活動も含めて、さらにその足跡を追いたいと思っている。

（しかたに・いさお＝奈良民俗文化研究所代表）

入手した松本楢重の執筆本